

市民参加条例検討委員会 学識者委員より話題提供頂いた内容のまとめ

◎真山達志委員 「地方政府の樹立と市民参加」

テーマ	主な意見
S.アーンスタインの市民参加の梯子、そのどのレベルで考えるのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市政と市民との関係で議論するので、おそらくこの梯子のなかでいえば、中間の4、5、6、7段階のどのあたりに設定して結論を出そうとするのか。 ・ 「パートナーシップ」は第6段階ぐらいがねらいか。市民が主体的に行い、行政がそれに協力するのであれば第7段階ぐらいだろう。
政策のプロセスのどの段階での市民参加を考えるのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 政策形成過程、政策のプロセスのなかのどの段階で市民が参加するのか。
問題の発見、分析の段階の仕組みと、そこへの市民参加が必要。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何を問題として取り上げ、それを政策に反映させるのかは非常に重要なのだが、これが市民参加の対象になることはあまりない。 ・ 知らないところでいつの間にか問題になって、政策の課題につながっている、あるいは、放っておく、ということが現実には多い。 ・ どういう仕組みでどんなふうにやればいいのかということになると、なかなか具体的な方法は難しい。
従来、事業課題の設定段階あたりでの市民参加の仕組みをつくってきた。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市民参加の多くは「事業課題の設定」「事業案の作成」「事業決定」のあたりで、手法的にいちばん多く投入されている。 ・ 行政の取捨選択が相当終わったあとで市民の意見を聞いているわけで、もっと早い段階でも聞いてほしいよという市民が多くいると思う。
協働という概念がよく使われるのは「事業実施」の段階。	<ul style="list-style-type: none"> ・ たしかに見た目は一緒にやっているのですが、実はやる内容とか方法の大半は行政のほうで事業という形で決まっている。そこに市民が加わる。そういうケースが多い。
市長マニフェスト、議員・議会などとの関係に課題がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市長マニフェストは市民の支持を得たということになるが、皆がそれを100%賛成しているわけでもない。 ・ 市が行政として市民の意見、意向、希望、問題意識、そういったものを吸収できるような市民参加の仕組みを考えていく必要がある。

◎ポーリン ケント委員 「誰が、どのように参加するか？」

テーマ	主な意見
「市民」をどう捉えるか	<ul style="list-style-type: none"> ・ できるだけ包括的（インクルーシブ）なものとして、排他的にならないようようにしておく必要がある。 ・ 住民、草津市を活動の拠点としている方、学生、いろいろなビジネスをやっている方、文化的活動、NPO活動等々の方々も入るのでは。
なぜ参加が必要なのか	<ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろな方が参加すると面白くなり、活気が出る。
どのような参加の枠組みをつくるか	<ul style="list-style-type: none"> ・ いつでも参加できるように、どういった方が参加するか、その方々が参加できるような仕組みが必要である。

	<ul style="list-style-type: none"> ・参加のレベル・回数をあまり重く考えないで、もう少し受け入れるつもりでやればいい。 ・問題把握の時点からいろいろな参加があり得たら、もうちょっと包括的な解決案を出すことができるかもしれない。
多様な市民参加をどう促進するか。	<ul style="list-style-type: none"> ・どうやって参加できるようにするか、私たち自分の課題として考えていく必要がある。 ・参加できるところで参加していただくと考えるともっと参加してくれるのではないか。 ・若者には参加しなくてもいいという社会ではないというふうに思わせてほしい。行政がまず参加しましょうということと呼びかけないといけない。
参加促進のための工夫について。	<ul style="list-style-type: none"> ・条例そのものは原則となるものなので堅いものになるが、解説する文章は、例えば小学生が読んでもわかるようなものも出せないか。 ・若者を気楽に参加させるために、情報ツールをどう活用するかも大きな課題ではないか。

◎山口洋典委員「学生の地域参加を巡る視点～そもそも市民参加とは……」

テーマ	主な意見
参加の場をどうつくるか。	<ul style="list-style-type: none"> ・フォーマル・インフォーマルとオフィシャル・アンオフィシャルによる4つのパターンを組みあわせながら参加の場をうまくつくっていくことが大事である。
市民参加とは何か。	<ul style="list-style-type: none"> ・この条例を検討するうえで必要な市民参加の最低限の定義は、市民の行政参加が大事だということであり、ここを約して市民参加とっている。 ・市政参加の条例なので、そのための手続きや必要な条件をうまく整備することが大事であるが、それだけでいいのかということもある。
若い世代の参加をどう促進するか。	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の若者は今の生活に満足しているが、承認要求が非常に高く、認められたいと思っている。 ・若い人たちがどこかで認められることをつくっていく必要があるのではないか。
ソーシャル・キャピタルの重要性について。	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャル・キャピタルというのはつながりが大事だといいながら、リーダーシップが重視されすぎたのではないか。 ・長野県の保健師さんたちのように地道で遠慮がちに奥ゆかしい活動をしている人たちがカギである。
社会活動の基本モデルと若い世代の市民参加について。	<ul style="list-style-type: none"> ・社会への関わり、参加のためには、それぞれの制度に組織が何らかの仕掛けをつくり、それぞれ組織の側から個人に「出番」をつくっていくことが必要である。 ・「出番ですよ」と役割をつくっていくということが、現在の問題として承認を求めている距離感に対して過敏になっている若者たちに接していく一つの眼差しではないか。